月刊ポニーリーグ

PONY PROTECT OUR NATION'S YOUTH

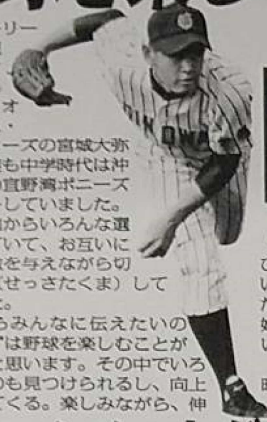
オリックス・宮城大弥投手(19)がポニーリーグに所属する球児たちにエールを送った。沖縄の宜野湾ポニーズOBで、ポニーリーガーから見れば憧れの大先輩。自身の中学時代の思い出も明かしながら、「とにかく野球を楽しんでほしい」と呼びかけた。

ポニーリーグに特別な思い 広がる支援の輪

野球を楽しみながら向上心持って

宜野湾ポニーズOB　オリックス・バファローズ投手

宮城大弥



小学6年生でケガも休むことなく右投げで練習

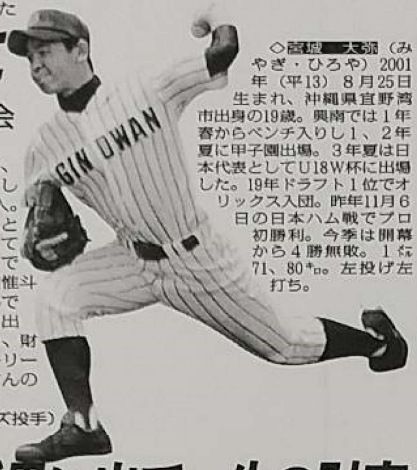
ポニーリーグの球児のみなさま、こんにちは。オリックス・バファローズの宮城大弥です。僕も中学時代は沖縄連盟の宜野湾ポニーズでプレーしていました。県内各地からいろんな選手が来ていて、お互いに良い刺激を与えながら切磋琢磨（せっさたくま）していました。

僕からみんなに伝えたいのは、まずは野球を楽しむことが大切だと思います。その中でいろんなものも見つけられるし、向上心も出てくる。楽しみながら、伸び伸びとやってくれたら自分もうれしいです。当時の僕はただただ野球をしたいという思いが強くて。能力がつき始めてから上のレベルで野球をしたい、考えるようになっていきました。

今は左投げですが、中学1年の入団時には右投げでした。小学6年の時にケガをしてしまって。また、高校でも野球をやるつもりだったので、練習を休むことなく、右投げでのプレーを選択しました。きれいなフォームではなかったですが、外野を守らせていただいて。左投げのピッチャーに戻れたのは、2年になってからでした。

チームメートが良い刺激に

U15の同期中田惟斗とはオリックスで再会



練習には自転車で25分ぐらいかけて通ってました。平日は毎日1時間、基地のゲートみたいなところで。午後7時にはしまっちゃうので、5時半から6時半ぐらいまで。土日は朝9時から午後2時ぐらいまで練習をしていました。

もともと個人の能力が高いチームでした。全学年合わせて30人ぐらいでかね。当時は球が速いと言われていましたが、僕の中で速いイメージはなかった。球種はカーブ、スライダー、たまにフォーク。2年の時はジャイアンツカップに行けましたが、3年の時には県の決勝で負けてしまいました。球数制限で決勝は2回しか投げられてなくて…。

3年では福島県であった、W杯U15の代表に選ばれました。ポニーリーグからは2人。人生初の国際大会ということで、本当に良い経験をさせてもらえました。オリックスでチームメートになった中田惟斗も、実は同じU15だったんです。そういった仲間たちと出会えたことは思い出であり、財産です。みなさんもポニーリーグの活動を通じて、たくさんの友人をつくってください！

（オリックス・バファローズ投手）

◇宮城　大弥（みやぎ・ひろや）2001年（平13）8月25日生まれ、沖縄県宜野湾市出身の19歳。興南では1年春からベンチ入りし1、2年夏に甲子園出場。3年夏は日本代表としてU18W杯に出場した。19年ドラフト1位でオリックス入団。昨年11月6日の日本ハム戦でプロ初勝利。今季は開幕から4勝無敗。1点71、80キロ。左投げ左打ち。

国際大会で出会った仲間が思い出で一生の財産

※中学時代の写真は比嘉一邦博さん提供

「ポニーファミリー　サプライ用品給付制度」を支援
株式会社大倉の代表取締役ＣＥＯ兼ＣＯＯ

清瀧静男

今季から始まった「ポニーファミリー　サプライ用品給付制度」を支援する株式会社大倉の代表取締役ＣＥＯ兼ＣＯＯを務める清瀧静男氏(45)が本紙インタビューに応じ、ポニーリーグへの思いを明かした。自身も近大付では2度、夏の甲子園に出場。野球界への恩返しとして、今後も惜しみないサポートを誓った。

ＳＳＫの野球用品をプレゼント どんな子にもチャンス与えたい

野球以外の選択肢持って

株式会社大倉のワッペン入りユニホームを持つ清瀧氏

――今回の支援に対する思いとは。

「道具を買えない子どもさんたちもいて、中にはそのことで野球を断念してしまうケースもあると。それなら、コロナの影響でＳＳＫさんの野球用品が売れないということも耳にしたので、私が買った道具で思い切りプレーしてほしい、と。ポニーであれば裕しい子どもも裕福な子どもも同じだけチャンスがあるという考え方なので良かったと思います」

――ポニーリーグをなぜ応援するようになったのか。

「僕もレギュラーでやっていましたが、ケガをして補欠の気持ちも分かるようになりました。ポニーはレギュラーだけではなく、そういう補欠の子どもたちにも目を向けている。そこに共感しました。育成をメインにやられていて素晴らしいし、これはぜひ、応援してみたい、と。賛同者が増えて、チームが増えればいいですよね。普及への支援をどんどんしていきたい。特に関西の普及に尽力したいですね」

――清瀧氏が感じるポニーの魅力を教えてください。

「中学生の親御さんの中には、野球だけの人生にスポットを当て過ぎてしまっている方もおられるのではないでしょうか。高校野球までに人生の全てをかけてしまい、その後の人生までもが終わったように考える人がいる。それが野球界の人材難につながっている部分もあるのではないか、と。強い高校に行くことが全てじゃない。野球だけではなく、野球を辞めた将来のことまで考えて進学するのは良いと思うけど、とにかく選択肢をたくさん持っておいてほしい。だから、野球以外にも目を向けているポニーリーグの普及が、そういう風潮をなくすことにもつながるだろうし、社会で活躍できる人材を提供していけると思います」

育成に重き置く方針に賛同 関西の底辺拡大に尽力したい

野球は後悔教えてくれる

近大付では甲子園に2度出場した清瀧氏（右）

――清瀧氏は甲子園に2回出場するなど、野球と真摯（しんし）に向き合ってきた。その中で学んだことは。

「後悔かな。野球をやっているときに、いま持っている知識があれば、もっと違っただろうな、と。それが今に生きています。野球は後悔を教えてくれたし、もっと前向きに言えば選択することを教えてくれた。経営者で成功している人というのは、大半の人が後悔を知っているのではないでしょうか」

――経営者として生かせている経験とは。

「ケガをして補欠の気持ちを知ったことが経営者としてはすごく良かった。経営者というのは、野球で言えば4番でエース。でも、裏方さんがどれだけやる気になるかが、組織の底上げにつながっていく。そこが一番、いまに生きています」

◇清瀧　静男（きよたき・しずお）1975年7月20日、和歌山県出身の45歳。近大付2年夏に「1番中堅」で甲子園出場。2年秋から主将を務め、3年夏にも甲子園出場を果たした。社会人野球の新日鉄堺でも1年目からレギュラー。新日鉄君津では松中信彦（元ソフトバンク）と主軸を組み4番を務めた。ミキハウスでのプレーを最後に23歳で現役を引退。その後、ビジネスの世界に転じ、現在は資本金30億円の株式会社大倉で代表取締役ＣＥＯ兼ＣＯＯを務める

▽ポニーファミリー　サプライ用品給付制度　対象者は①世帯収入が400万円以下の者②障害等級1級および要介護者が同一世帯に住居する者で毎年度2月末日までに証明書を提出（中学1年生は5月末日）。協賛社であるＳＳＫの野球用品券が贈呈され、スパイク、グラブが支給される。